

八中3年人権だより

徳島市 八万中学校
3年生 第19号
2024年12月2日
編集・文責 吉成正士

11月18日、最後の学年全体人権学習を行いました。
今回は、前号で紹介した丸岡忠雄さんが書かれた詩「ふるさと」を資料にして、次のような問いかけをしました。

「ふるさと」のなかで自分に刺さった言葉を通して、大切な友へ、大切な家族へ、大切な故郷へ、自分のなかにある「思い出」を添えて言葉を贈りましょう。また、みんなの発言に言葉を返していきましょう。

自分が書いた文は自分のなかにあるものです。原稿は見なくても発表できます。今回は生きた言葉を届けてみましょう。いくつもあれば、何度でも。

これまで3年間、思いを込めて取り組んできた学習です。それは年月を経て、3年生全体に染み込んできたように思います。その最後の瞬間に寄せて、感想が寄せられてきました。今回もその感想を中心に全体学習をふりかえり、その記録を残しておきたいと思えます。3年生の皆さんが辿ってきたあゆみの集大成です。



自分がルーフの一人目に

■僕は今日の全体人権学習で、いろいろな人の意見を聞いて、たくさんのことを学びました。Kさんの言っていた「差別がなくなるには、差別をされた側も悪いと思ってしまうから」という言葉に、とても納得しました。それがルーフになって、差別しようとする心はなくなるし、差別もいまだに残っているのだと思います。僕は人は、一人が何かすると、周りの人もだんだんと影響を受けていく生き物だと思います。だから、差別が起こると差別は広まってしまうのだと思います。けど、逆に一人が良いことをすると、それも周りに広まっていきます。吉成先生の言っていた「人はやさしくすると、人にやさしくされる」という言葉はその通りだと思いました。僕は、誰かが悪いことをして、クラスが悪い雰囲気になる前に、良いことをして、クラスを良い雰囲気にする「一人目」になりたいです。そのためには、今まで人権学習で学んだことを生かし、正しい知識を身につけたうえで、「自分が周りの雰囲気を良くも悪くもできる」ということを、しっかり理解することが大切だと思います。そのために、3年間学んできたことが燃え尽きないよう、学び続けていこうと思えました。

5組 麥倉瑛心

何か一つの差別が起きるとなかなかなくせないのは、こういった作用があるからかもしれません。人伝えに伝わっていくからです。特にネット社会となっている現代は、なくすのが難しいといえます。

Kさんは次のように発言してくれました。

さっきの吉成先生の、「情けは人の為ならず」の話を聞いて、最初、なぜ差別された人が差別するのだろうと思って。その理由を自分なりに一瞬考えてみたんですけど。そういう差別されて差別してしまう人って、どこから差別された自分も悪いなと思ってる節があると思うんですよ。だから自分が差別しても、相手にも悪い部分はあるんだって思ってしまうし、誰も悪くないのに悪さができてしまうっていう。差別された人も難しいけど、悪いかって言われたらそうでもない。差別するっていう部分もあるけど、絶対他にもいいところがあって。ほなけんそういう何も悪くないのに、悪さっていうのが出てきてしまうから、ちゃんと自分の悪い部分とか、そういう部分とかを自覚して、そこを他の部分で補っていくってことが大事なんじゃないかなと思いました。

(6組KN)

差別を信じて広めようとする勢力と、それをなくそうとする勢力。なくそうとする勢力が大きく広がればいいのですが、どうでしょう。ネットや特に動画が及ぼす効果は想像以上に大きいのかもかもしれません。

先日も、テレビニュースよりもネット検索した方が正しい情報が得られるからよく使っている、というインタビューが出ていました。ネット情報自体に偏りがあると思えていないわけです。怖い社会になったなと思えます。皆さんは、ネット情報を安易に信じ込んだりはしていませんか？



自分がやったことは自分に返ってくる

■今回の人権学習を通して、人のために行動することがとても勇気のいることなだと感じました。発表してくれた人たちが言っていたように、「人の立場になって考える」ということは、口では簡単に言っても、やってみると相手がどう思うのか、何を感じているのか、理解するのは限りがあった一番難しいことだと思います。でも吉成先生のように、

部落の地域に実際に行ってみたり、弘瀬喜代さんみたいに人の相談を受けて、まるで自分が嫌な思いをしているかのように何日もかけて行動している人がいて、本当にすごくなって思いました。だから自分も、少しでも人の役に立ってやさしくできるようになりたいです。

吉成先生が「人にやさしくしたら人にやさしくされる」と言っていました。親にも、自分がやったことは自分に返ってくるはずと言われ続けてきました。今まではうるさいなって思いながら聞き流してきたけど、これは勉強だけじゃなくて、人権学習にもつながっているんだなと思いました。だから、人のためにやさしくするのではなく、自分のために人にやさしくすると考えられるようになりたいです。今まで自分たちがやってきた人権学習を通じて、少しでも差別が減って、つらい思いをする人が減ったと信じて、これからも学び続けていきたいです。今回で最後の人権学習だけど、今まで学んできたことを心に刻んで、何事にも全力で取り組みます。

3組WN

自分で自分の欠点・弱点を見つけ、それを直そうと思っても、なかなかうまくはいきません。すぐにはうまくいきません。うまくできることもあるのかもしれませんが、私が自分の差別意識や弱さを直そうと思っても、いまだに直せません。直そうと思い、そのことと向き合うことの連続であり、繰り返しのうちに今もいます。勉強して点が上がることの方がよほど楽なことのよう思えます。

だけど不思議なことに、その欠点や弱点に向き合おうとしている自分のことは嫌いじゃありません。むしろ、心地いいのです。なかなかうまくいかないことばかりですが、それでも自分の欠点や弱点から目を背け、見えているのに見えないふりをするより、よほど前向きになれます。まるで、逆境に向き合う自分です。向かい風に立つライオンです。

とはいえ、くじけそうになることもあります。どうして！どうして！と思い悩むこともあります。それでも頑張れるのは、皆さんがいるからです。皆さんの一生懸命さが発表から、感想文からひしひしと伝わってくるから、楽しいと思えるし、また「頑張ろう」と思えるのです。そんな仲間の存在や共感があれば、人の頑張りは継続できるのかもしれませんが。応援してくれる人、支えてくれる人の後押しがあれば、人は思う以上に力を発揮できるのかもしれませんが。人はやはり、ひとりでは生きていけないということかもしれません。



誇りをもつためにも人権学習は必要

■「ふるさと」を通して、故郷のことを思い出しました。私は5歳ぐらいまで滋賀県に住んでいました。当時住んでいた団地のようなところに、去年行く機会があって久しぶりにその場所を訪れました。そのとき、私はとても懐かしい気持ちになりました。8、9年ぶりぐらいだったので、団地の別の棟に住んでいる友達が最後に会ったときは赤ちゃんだったのに、今は小学生になっていて驚きました。住んでいたころの思い出もだんだんとよみがえってきました。でも、もし部落差別を受けていたとしたら、故郷に帰りたいとも思えないだろうし、懐かしむこともなく、むしろ忘れようとするのではないかと思います。だから、自分の生まれ育った環境に誇りをもつためにも、人権学習は大切だと感じました。自分とは関係ない遠い存在だと思っけていても、実は守られていた。見えていなかっただけで、案外近くにあることだってあります。それらのことを知るためにも、学び続けていくことの重要性を改めて理解できたような気がします。

学年全体人権学習は今回で最後になってしまったけれど、決して燃え尽きることはないようにしていきたいです。そして次は、これからのことを大事にしていきたいと思しました。

1組KK

「砂の器」という小説があります。松本清張という作家さんが書かれた作品です。いくつも映画化やテレビドラマ化されているのですが、その最後で、主人公である父子の老いた父親役が泣き崩れるシーンがあります。遠い昔に別れた、たった二人だけで過ごした過去のある父子の回想シーン。そんな思いで過ごした父子であるにもかかわらず、父はその子を決して我が子と認めようとはしません。懐かしく大切な思い出を過ごしたにもかかわらず、父子であることを決して認めようとはしないその根底にいったい何があるのか。何度も何度も観るのですが、何度観ても涙なくしては見られないラスト30分です。と同時に、人は表面だけを見ていては、その人の最も大切なことまでは知り得ないということを思い知らされます。私もその人の奥にあるものを見つめようとする人であり続けたいと思います。皆さんにもぜひ観てもらいたい作品です。



学年が一つになるような空間

■最後の人権学習を終えて、故郷の大切さを学びました。故郷は生まれ育ち、多くの友達と大切な人と出会い、思い出がたくさん集まった場所です。過去に面倒くさいと思っけていた時間も、時間がたてば、あの時に戻りたいなと思ったり、懐かしく思ったりしていきます。故郷を大切に思う気持